

〈全体講座〉 「体育を変えた実践家②」

「荒木豊氏の『系統性』を、 今、どう引き継ぐか」



久保 健（日本体育大学・宮城支部）

学校体育研究同志会に参加している皆さんにとって、「同志会の実践と研究の魅力」とは何でしょうか？いろいろあると思いますが、中で多くの皆さんに共通するものとして、「ドル平泳法」による水泳指導、「2：0」から始まるボールゲームの指導、マット運動における「側転」を核とした指導などの、子どもも教師も「誰でもが、楽しく、できる・わかるようになる」体育の学習指導法があげられると思います。これらは、同志会の先人たちの「技術指導の系統性研究」の成果です。

みなさんの中には、「ねこちゃん体操」や「お話しマット」や「じゃまじゃまサッカー」などに魅力を感じている人もいるかもしれません。これらも確かに「誰でもが、楽しく、できる・わかるようになる」体育の学習指導法の第1歩には違いないのですが、「技術指導の系統性研究」との関係性をどう考えるべきかについては、少々議論が必要ですので、今日の私の話では、ちょっと脇にどけておきます。

今日の私の話では、同志会の先人たちが、いつごろ、なぜ、何のために、どうやって、「技術指導の系統性研究」を行ってきたのか、そして、その研究と実践を支えてきた考え方、方法、意欲と情熱と

は何だったのか、さらに、その恩恵にあずかっている私たちはそこから何を引き継ぎ、発展させて行けばよいのかについて考えてみたいと思います。

「技術指導の系統性研究」への途

同志会の創始者である、故丹下保夫さんは、学校体育の戦後改革期に、「生活体育」という体育のあり方を模索しました。これは、今日風に言えば、スポーツを生活の中に根づかせることと、民主的な人間（関係）を育てることを合わせたような「ねらい」を持つ体育論でした。そして、そのために、体育の授業と自由な時間におけるスポーツ活動とを、子どもたち自身による「行事を計画・運営・反省する活動」によってつないだ行事単元を中心にして、学校体育の年間計画を組みました。また、その「行事の計画・運営・反省」のための話し合いとともに、体育授業においては、児童を中心とした異質集団による問題解決学習（グループ学習）を取り入れました。

しかし、そうした学校体育の構想が実践的に実を結ばないうちに、学校体育の内外の情勢が大きく変化してきました。

外の情勢としては、「冷戦」の開始とと

もに、その世界を二分する対立の中に日本が位置づけられたこと、また、「スポーツ・ショック」を契機として、世界中に現代科学の成果を教育に取り入れるべきだという考え方が広まったことがあげられます。そして、それらを背景として、日本の教育政策に「逆コース」と呼ばれるような変化が生じました。体育の世界では、児童を中心とした問題解決学習に対して、「話し合いばかりで技能が身につかない」として系統指導の立場からの批判が投げかけられました。

こうした中で、同志会の先人たちは、現代科学の成果を教育に取り入れること（子どもにできる・わかる・かかわる力をつけること）は重要だと考えましたが、それは「生活体育」のねらいや方法（グループ学習）と統一できると考えました。また、当時の系統指導の立場の人たちのスポーツ指導が旧来の精神主義・根性主義や経験主義に基づいたやり方や、一流選手の技術（技能）を要素主義的に分解して教え込むやりかたでは、すべての子どもたちをできるようにも、わかるようにもできないと考えました。

そこで取り組まれたのが「技術指導の系統性研究」です。その研究方法は、①あらゆる分野の現代科学の成果に基づいて指導法を洗い直すことと、②教育現場における子どもと教師の実践（できる・わかるようになるための格闘）から徹底的に学ぶこと、の2つでした。

そして、その研究成果は、体育におけるほとんどの教材（種目）にわたる系統

的技術指導法として、1972年から1986年に『学校体育叢書』として世に問われました。これは、日本の学校体育に大きなインパクトを与えました。

荒木豊さんに学び、引き継ぐもの

この一連の研究と実践を中心となってけん引した人物が、荒木豊さんでした。昨年の冬大会の「体育を変えた実践家①」では故中村敏雄さんを取り上げましたが、今年の冬大会の企画段階では、その②として荒木さんに的を絞り、お元気なうちにそのお仕事から何を引き継ぐかを検討しようということでしたが、残念ながら、荒木さんはこの11月24日にお亡くなりになってしまいました。そこで、今日の話は、荒木さんに追悼の意をこめつつ、その生き方と思想、書かれたものを中心に据えながら、同志会の「技術指導の系統性研究」の真髄とは何なのかについて考えたいと思います。

具体的には、系統性とは何か、技術（技能）とその指導法をどう考えるか、その際の「要素」と「単位」とは何か、現代科学の成果を教育に生かすとはどういうことか、教師の指導の系統性と子どもの学習の主体性の関係をどう考えるか、1980年代以降の「技術指導の系統性研究」の発展とは何か、そして、それらを私たち一人ひとりがどう受け継ぎ、集団的に発展させて行くべきか、等々について話すつもりでいます。